

■ 書 評 ■

ボツリヌス療法アトラス

Wolfgang Jost ● 著
梶 龍児 ● 監訳

慶應義塾大学教授 リハビリテーション医学・医工連携 木村彰男

ボツリヌス菌が産生するボツリヌス毒素は、神経筋接合部でアセチルコリンの放出を妨げる働きを持つ。一般にボツリヌス毒素の作用は末梢性に限られるとされており、筋弛緩、鎮痛作用に効果のあることが確認されている。そのため、近年では各種疾患の治療に用いられるようになり、多方面から注目を集めている。

日本国内においてはA型ボツリヌス毒素製剤ボトックス®が注射剤として承認されており、1996年に眼瞼痙攣、2000年に片側顔面痙攣、2001年に痙性斜頸、2009年に2歳以上の小児脳性麻痺患者における下肢痙縮に伴う尖足へと徐々にその適応が拡大され、2010年に上肢痙縮・下肢痙縮への適応承認へと至る経過をたどっている。リハビリテーション医学・医療の分野では上肢痙縮・下肢痙縮に対するボツリヌス毒素の適応が拡大されたことにより、特に脳卒中患者の後遺症に対する治療として急速に広まりつつある。ただ、どの筋を目的に、どのくらいの用量を使用するかに関してはまだ基準がなく、臨床経験の積み重ねにより標準化されていくことが期待されている状況である。

ボツリヌス治療の実際に関して

は、運動学の観点から目標となる筋肉を決定し、その筋に正確に注射する必要がある。臨床神経生理学を専門とし、筋電図検査に精通している神経内科やリハビリテーション科の医師にとっては、表面解剖や機能解剖は基本的知識であり、筋の同定はそれほど難しくはなく、フェノールなどによるモーターポイントブロックに比べ、手技的にはむしろ比較的容易といえる。しかしながら一般の医師にとっては、目標となる筋の同定に苦労することも多いと思われ、専門家にとっても深部にある筋や、神経・血管の近傍に注射を施行する場合には、細心の注意を図る必要がある。そのため電気刺激を用いたり、筋電図や超音波を使用しながらボツリヌス療法を行うこともしばしばである。

このようなボツリヌス治療の手技に習熟し治療を実践するうえで、本書は最適な教科書といえる。治療の対象となるであろうすべての筋肉について、その表面解剖、筋の機能はもちろん、注射の際の筋へのアプローチ法、各製剤の標準的な用量、臨床上的注意点が、極めて繊細なアトラスとともに示されており、本書がボツリヌス療法のガイドブックとしての大きな役割を果たすことは間



違いないと思われる。ただしドイツでの使用状況が基本として書かれていることから、当然ながら商品や用量などについては日本の現状に即して考える必要があり、適応外のものに関しては用いるべきではない。

監訳者である梶龍児先生は、わが国におけるボツリヌス療法の第一人者である。長い使用経験を有するとともに、上肢・下肢痙縮へと適応が広がる際には治験をまとめる責任者として大活躍された方であり、このような先生の監訳のもと、徳島大学神経内科の先生方が中心となり、ボツリヌス療法実施の際の座右の書となるべく本書をわかりやすく訳されたことに多大な敬意を表する次第である。広く本書が愛読され、治療適応となる患者さんに多くの恩恵がもたらされることを期待したい。

A4 頁272 2012年
定価18,900円
(本体18,000円+税5%)
[ISBN978-4-260-01520-2]

医学書院刊